

釜ヶ崎の赤いげ先生

—— 本田良寛伝 ——

《 2 》

釜ヶ崎は東京の山谷と
ならんで日雇い労働者の
まちとして有名である。

今では単身の高齢労働者
が住むまちでこれまでの
過酷な労働、偏った栄養、
過度の飲酒、不衛生な環
境などから本田良寛先生
が釜ヶ崎に暮らした当
時、結核の罹患(全国平
均の35倍)、性病(大阪
平均の30倍)、アルコー
ル中毒、C型肝炎(全国
平均の10倍)、精神の不
安定などを抱える患者が
多かった。

このため良寛先生は大
阪市、大阪府に働きかけ
て愛隣会館、あいりん学
園、西成保健所分室を作
るのに尽力した。197
0年7月には大阪社会医
療センター付属病院を起
ち上げ、診療費が払えな
い患者に対しては「ある
時払いの催促なし」の前
代未聞の借借書を書いた。

良寛先生は新病院につ
いては、「こう述べていた。
」どんなに疲れた人が来

徹底した患者目線の診察

「裏表なく良うしてくれただ」

に体をやすめられる釜ヶ
崎―大阪西成区の釜ヶ崎
でなく、日本の釜ヶ崎と
いわれるような所に造り
かえるために。―(本
田良寛著「釜ヶ崎かて明
目がある」)
怒ることが愛情
開院すると良寛先生の
「ある時払いの催促なし」
の借用方式の無料低額診
察に金配なく心ゆたか
法人「紀和会」事務局長



「良寛先生はわれわれを
院内に招き入れ、話を
じっくりと聞いてくれ
たと話す阿修羅さん



「酒を飲んでの診察はお断り」の看板
がある大阪社会医療センター付属病
院の1階玄関口

療事業は釜ヶ崎の日雇い
労働者に受け入れられ、
毎日、200人以上の外
来患者が来院し、ベッド
が空くことはなかった。
一方で、開院した70年代
当時は患者も元気で酒を
飲んで受診にくる労働者
も多く、酔った勢いで社

「酒を飲んでの診察はお断り」の看板がある大阪社会医療センター付属病院の1階玄関口

内弁で怒りを爆発させ
た。
しかし、当時の患者か
らは慕われていた。「わ
れを院内に招き入れ、話
をじっくりと聞いてくれ
てくれた。裏表がない
中平さんはこう振り返
る。「社会医療センター
には当時、売血の方が結
構おられて、本当に怒っ
ていましたね。ええ加減
にせいで。店やそこらで
血を売って、どないすん
ねん。ただ、本当に怒る
ことが愛情であったよう
な気はするんですけど。
怒りじゃなくて本当に助
ける意味で怒ってるとい
うのが本田先生にはあっ
たんです」

(大山勝男)

寄り添う医療活動

70年万博景気にわく大
阪に職を求め、大阪釜ヶ
崎に住み日雇い労働生活
を続けた水野阿修羅さ
い。現在では、釜ヶ崎の
生き字引」と言われる阿
修羅さん(日本寄場学会
会員)は、社会医療センタ
ーでは1972年当時、
一階受付に警察OBを雇
い、かつて患者に対して
粗っぽい対応をしたこと
があった。それで、社会
医療センターに私たちは
運動体として抗議の投石
をしたことがあった。す